



昭和18年8月，67歳の石川三四郎。この頃，東洋文化史の研究に没頭していた。



「……春月の遺骸が陸揚げされた小豆島の一角に美しい詩碑が樹てられた……」(本巻61ページ) 昭和11年6月21日、春月之碑除幕式に集った人々。碑の真前に萩原朔太郎、1人おいて右に望月百香子、右後方に石川三四郎の顔が半ばみえる。



平民社2階の編集室にて。左より神崎順一、幸徳秋水、堺利彦、石川三四郎、西川光次郎、柿内武次郎。(第8巻『自叙伝』102ページ参照)



昭和14年8月6日、新宿、宝亭で開かれた西山勇太郎『低人雑記』出版記念会。「魂の姿」(本巻151ページ)は西山の編集した雑誌『無風帯』に掲載された。前列左より草野心平、辻潤、西山勇太郎、石川三四郎、川合仁、遠藤斌。後列左端、穂曾谷秀雄、川合仁のうしろが庄司きみ。

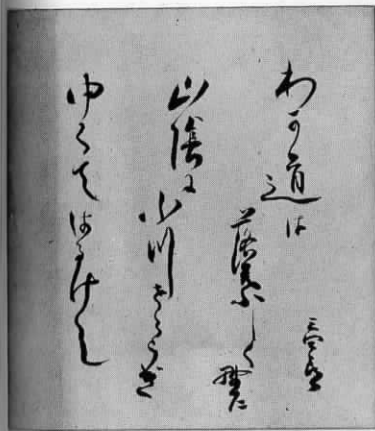


明治41年5月19日、巢鴨監獄より出獄の日。角筈の福田英子宅にて。前列左より1人おいて五十嵐某、1人おいて石川三四郎、逸見弁吉、木下尚江、石川のうしろ最後列が福田英子。

目次



爾来三十年、彼は壁に向つて座はり通して沈黙の雄弁を今日まで続けて来た。(本巻93ページ)。木下尚江。「死去すこし前」と裏に記されている。



石川三四郎筆の色紙(本巻439ページ参照)



小豆島の一角に建つ春月之碑。碑銘は石川三四郎の筆である。(本巻61ページ参照)